

くろつけ

鈴



平成六年五月二十七日第 一 種郵便物認可
平成 一 二年一月 一 日発行 毎月 一 回 一 日発行
発行所 東京都 一 区 一 丁目 一 番 一 号 一 号 一 号

くろつけ

新春号

俳句雑誌

GLOCKE

第 237 号

I . 2014

謹賀新年

州浜

品川鈴子

飾り鯛首曲げ尾上げりハビリか

頸椎をビス留めの吾が飾り鯛

水槽の小魚賀詞の相方に

注連掛けて開けずのままの迎賓棟



大擋^た網^もで州浜を浚^たふ初仕事
大擋網とゴム胴長の初園丁
金運はユーロ崩れの初相場
杖までも新調したる初吟行
片しぐれ陶の碑を撫づ一期生
船底の雑魚寝に寒の灸を据ゑ



玉

鈴

吟

埼玉 松本清川

田の隅にゴミの山出来野分あと
湯浴みして亦木屋の香を浴びぬ
千石原みんな芒に消えにけり
一畝ごと名札差しおく甘藷畑
役終へし火の見櫓を毀す秋

兵庫 松村晋

誓子館一輪挿しの式部の実
後の月形見に覗いただきぬ
喪のあけぬ庭を仄かに十三夜
秋寒しそろそろ渡る蔓橋
大榎植玄関ポーチに飾られて

東京 松本アイ

終戦日厨に母は菜を刻む
八月や平和の文字を手で確と
夏銀座金春通り路上能
園庭の子等に代りて蟬しぐれ
秋一段ためらいこそつと降りてくる

愛媛 松本恒子

台風圏だんじり神輿のフィナーレ
藁塚の積みしばかりに来る鴉
旅人に交じりて見上ぐ雁の棹
現世に知人減りゆく十三夜
母の杖磨きて仕舞ふ秋思かな

愛媛 三浦澄江

庭に鳴く虫も家族よ一人の夜
住み古りし海辺の明け暮れ紫苑咲く
大潮の護岸すれすれ台風過ぐ
青柿や子育て頃は貧しかり
秋の蝶風に吹かれて空に消え

兵庫 水野範子

茶室より手招きのあり竹の春
閑伽桶の箍ゆるみある墓詣
道化師のだぶだぶズボン秋の寺
緬羊の気まま散策霧の牧
杜鵑草根締め悪しきを供華となす

兵庫 水野 弘

朝日受け白き肌みせ大根畑
秋の風葉擦れに目覚む閨の中
秋句会別れは杖の上げ下げで
播種多くひしめきあいて大根の芽
大樹揺れ枯葉散り初む飲み屋街

香川 三橋 早苗

腹大き蠟螂休むブロック塀
油断せりぼろぼろ零る実紫
吾亦紅一枝提げて画塾の日
副業の農家の納屋に芋納豆
灌木に鳩うづくまる台風来

茨城 三輪 慶子

柚子の実の黄ばみ初めたり雨催ひ
水引草脛にはじけば揺れやまず
掃除の手休めてをれば鴟高音
葉先より紅葉て光集めをり
衰へを知らず咲きつぐ赤のまま

埼玉 向江 醇子

秋湿り主役少年変声期
素人の楽屋は廊下秋暑し
さはやかや一度で通る針のめど
敬老日雨に流れて菓子貰ふ
七人もぬながら一人秋思かな

兵庫 村田とくみ

お手あげの風ふうにあおのけ青蛙
寺門わき凭る影二つ踊り笠
木苺を教へリユツクに肥後の守
席ゆづらる迄のうきうきサングラス
籠枕 据 糸 銀行の奥 座敷

大阪 師岡 洋子

木の洞に育つ別の木小鳥来る
空高しさつと切り裂く板硝子
昼ちちろ空家にのこる流し台
子規の忌を夜遊びめきて書肆にをり
針焼いて棘抜く夕べ雁渡し

東京 安田とし子

(世界一高いタワーなれば)
スカイツリーの尖より濡るる秋しぐれ
とりたてて変りなき日や雁渡る
山門に侍して実柘榴大笑す
饒舌の秋夜の客は異邦人
夕映えの丹沢連峰鳥渡る

兵庫 明石 文子

長州も会津もなくてねこじやらし
留袖を娘にゆづる天高し
辻々の地蔵見守る秋祭
十年目金木犀の返り咲く
刈り込まれ樹上の巢ゆれ秋暮るる

愛媛 足利 罇子

煽られて喧嘩で終る秋祭り
宮入りの神輿よそ目に鉢合せ
年一度締める鉢巻き運動会
台風が季節入れ替へ敬老日
形見にと届きし絹の秋の服

兵庫 荒木 治代

秋日和句帖と季寄せ持ちて旅
白壁の残る蔵町新酒の香
川筋に飛驒の朝市小鳥来る
天高し鳩の遊べる大鳥居
二次会を辞して一人の月の宿

兵庫 荒木 稔

姉川の霧にひびける鳥のこゑ
古戦場霧かたまりて流れけり
虫すだくくずれ土堀の御師屋敷
うそ寒や路地に止まりし救急車
枝豆や就活ばなしそれとなく

大阪 居内 真澄

挨拶は松茸御飯と荷物解く
花町へは姪と歩めぬ老の足
又来ると歩み早めて秋の暮
台風禍文明の果て原子洩れ
補聴器を外せば軽き身の良夜

大阪 池田 かよ

季節ものとは茹でむかごメニユー見る
奈良の鹿韓語英語も分かるらし
土地の値の二転三転猫じやらし
年金の引き下げを知る敬老日
どんぐりのころころ若者村を捨て

兵庫 池田 久恵

とろみつけ水飲む体調秋の暮
タオル首奈良より来たと柿盛らる
栗ご飯届きし友の塩加減
「横這い」と返事は元気天高し
静けさは野分の前のくくり紐

香川 石川 裕美

買う方が安い気もしてぶどう狩
大金も小銭もなく穴惑ひ
自然薯を持ちて男児の二刀流
秋刀魚焼くぎつくり腰は完治せず
ダンボール敷いて夫婦の月見酒

大阪 石橋 萬里

鵬猛り吟行の空引き締まる
十五夜に手を合はす母真似る子ら
崖下に墓ひとつあり烏瓜
蓑虫のふらりふらりと職持たず
地の怒り蕊に伝へて曼珠沙華

兵庫 市橋 香

秋灯下「おくのほそ道」今更に
夫早寝秋の夜長を独り占め
連れ添ひて早五十路なるははきぐさ
朝寒をものともせずには操へ
年号を戸惑ふ齡秋深し

愛媛 伊藤マサ子

神輿かきお供の鬼も代変り
祭り来る山車の太鼓の遠近し
大家から青き酸橘の届きけり
幽玄に惚けし合飲の帰り花
廊下まで香り広げて金木屋

大阪 井上あき子

コルク栓きりきりと抜く新走り
豊国の堂内未完秋寂びて
棧橋に神の使の鹿現れる
怖さ知らずの空中散歩溪紅葉
地図を手に釣瓶落しの神の島

兵庫 井上加世子

釣人の頭上に開く秋花火
ハーバーに深く広がる秋花火
台風の窓細く開け生徒待つ
満月を愛でに集まる露天風呂
満月の浜にルシアン(ロシアの狼)ウルフという犬種立つ

愛媛 今井 忍

稲刈機朝の渋滞従へる
秋陽さす茶房に遺作の絵画展
野分晴組み立てハウスでき上がる
尻餅の土払ひ遣る吾亦紅
手話交し合ひ校門の落葉掃く

兵庫 岩木眞澄

廃屋にコスモスの風押し寄せて
秋出水五十鈴川にも柵張られ
秋といへ四方に緑の伊勢の森
秋麗伊勢名物に芭蕉の句
玉砂利を鎮める木杳秋深し

兵庫 岩崎可代子

花木権ホテルとなりし離宮跡
見て触れて踏みて落葉の歌を聴く
それぞれに良き伴侶ゐて催の月
一括りにされたくなくて草紅葉
到来の菓予を配りて萩の句座

兵庫 岩田登美子

増税の是非さまさまに秋暑し
お月見の粘る団子を重ねゆき
稲かけを終へれば比良山しんのやみ
台風過富士は輪郭際立てり
紅葉にやつと出会へり白樺湖

鈴の奏

品川鈴子選

あたふたと男の炊事しめじ茸 兵庫 太田 健嗣

暑き秋清めし諸手赤子抱く
饑別に無糖コーヒー貰う秋

括れてる新種の南瓜食べ尽くす
虫すだくベストセラ―も終盤に 兵庫 中村 吟子

木犀の香りて亡夫つまの在る如し
吾亦紅子育て昭和遠くなり

朝駆けの魚屋持ち来る太刀魚たちのお
能舞台音無き砧打ちにけり 埼玉 松岡悠喜夫

十月や娘が卵焼いてをり
新米を櫃へ娘の手を借りて

ひよどりの声や団地の四方より
風揺れの撫子も寄る誓子句碑 兵庫 岡田満喜子

呼吸器の叔父を見舞ひて身にぞ入む
秋祭り家族二軒の島なるも

萩零る老僧所作のゆつたりと
病室の半畳の窓秋の空 兵庫 板倉真知子

カロリーの計算外の林檎むく

脳内凶異常ありとや秋暑し

揺れて風かわすコスモス荃太し
四方の春婚約ととのい写真とる 大阪 小菅美代子

焼き葱の舌焼く程に甘さ増す
紙屋川下り行く程に梅ふくらむ

一輪車上手にくぐる梅の花
楽しさも釣瓶落しのゴルフ場 東京 樋口 正輝

隣から松茸ご飯有難し
秋の空妻を亡くしてはや五年

仏壇に白菊飾り旅に出る
台風の予報惑わす二つの目 兵庫 津田 霧笛

加齢臭気づかせまいぞ敬老日
孫の守さんざ遊んで菊の酒

面前でお姫様だっこ婚の秋
砥峰とのみねの芒の波に迷い込み 兵庫 植田 雅代

吾亦紅步哨あちこち分断地
肩痛み通う整形秋の暮

黄に染めし柿の一葉が刺身載せ

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十句 岡 敏恵 評

*選句は全て 品川鈴子

あたふたと男の炊事しめじ茸

太田 健嗣

慌てて仕事から帰ってきて、すぐに夕食を作ることができるところに年季の入った男。「匂い松茸、味しめじ」と昔から言うようにしめじは美味しく、季節感があり、松茸などと違い安価。炊き込みご飯にして、人参や青いものを散らしたら、簡単で、美しい豊かな食事になる。御飯が蒸れるまでにお吸い物など作ってそえたら、もうどこへ出しても恥ずかしくない。

吾亦紅子育て昭和遠くなり

中村 吟子

昭和は子育てに集中した充実期。その時は忙しくてやりきれないと思ったりもしたが、振り返ると家族がそろっていた楽しい時間だった。山上憶良の「まさされる宝子にしかめやも」ではないが……。

能舞台音無き砧打ちにけり

松岡悠喜夫

砧は布を柔らかくし艶を出すために、木や石の板にのせて槌で打つこと。冬支度の一つで女の夜なべ仕事だった。その音が哀れを誘うことから歌や俳諧に詠まれてきた。能の「砧」では、都に上った夫を故郷で待つ妻が、上人を偲びつつ砧を打つ場面がある。シテが砧を打つ所作をすると、恨めしい音が聞こえるようだ。

秋祭家族二軒の島なるも

岡田満喜子

秋祭は村祭、浦祭などとも呼ばれる。小さな離島に今はもう二軒の家族しかいないという。自給自足の日々、秋には米や野菜、海で捕れた魚を供えて神様に感謝の祭りを行う。共に助け合う、穏やかな島の暮しが見える。

カロリーの計算外の林檎むく

板倉真知子

秋は果物の季節。梨・葡萄・柿と続いて林檎。イギリスでは「医者いらずの果物」とされる林檎だが、糖尿病などでカロリーの制限を強いられているお方には逆効果。辛い季節である。好物を前に我慢など無理、もう少しだけと作者は林檎をむいてしまったようだ。でも食べ過ぎにはご注意ください！

焼き葱の舌焼く程に甘さ増す

小菅美代子

根深葱を4cmに切り、焼き網を熱して焼き日をつけて焼く。味噌で食べれば中からトロリと甘い葱が舌に乗る。何という美味しさだろう。作者は八十才代、中七の「舌焼く程に」のところで、料理の達人とお見受けした。

仏壇に白菊飾り旅に出る

樋口 正輝

同時投稿句から奥様を亡くされて五年と知り、白菊は奥様への供花。仄暗い中にあつても白い花は辺りを明るくする。旅行中も奥様が淋しくないようにという思いやりあふれる句。行き先はお二人の思い出の地でしょうか？

加齢臭気づかせまいぞ敬老日

津田 霧笛

力強くて楽しい句である。敬老日にお孫さん達がやって来る。朝から散髪、髭剃り後にはシェービングクリーム、十才若返りの洋服にオーデコロンをふる。お孫さん達はお洒落なおじいちゃまが大好きだ。「加齢臭」を句材に詠み、面白くまとめた。

吾亦紅歩哨あちこち分断地

植田 雅代

吾亦紅は山野についついと茎を差し交しつつ引き出る。暗紅紫色の無弁花は野趣があり寂しげである。作者は、その花がまるで歩哨兵のように野に立ち、敵地を分断するかのようだと言んだ。何を警戒・監視しているのだろうか。擬人法により想像力を掻き立てられる句である。

台風一過お下がりの産着干す

堤 節子

この秋は台風が続いた。お産の準備に気を採む中、やつと台風が通り過ぎた。広がる青空に産着が光る。お下がり布がこなれていて柔らかく、ご家族の愛情がいつぱい。一読思わず微笑みがこぼれた句。お健やかなご成長をお祈り致します。